



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

2

平野敬一訳

平井正穂訳

中央公論社

新集 世界の文学 2

©1971

デフォー

訳者 平野敬一

平井正穂

昭和46年 3月 5日初版発行

昭和49年 5月31日再版発行

発行者 高梨 茂

本文整版印刷 三晃印刷株式会社

扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

クロス 日本クロス工業株式会社

函ボール 佐賀板紙株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地

電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

ロビンソン・クルーソー

3

ペスト

291

解説
年譜

548

566

ロ
ビ
ン
ソ
ン
・
ク
ル
ー
ソ
ー

編者自序

ひとりの人間がこの世で出会ったさまざまな冒険を語ったものが、公表に値し、その公表されたものが世人に受け入れられる、という例がもしあるとするなら、この話こそ、それに該当しよう、と編者は考えるものです。

この話の主人公が体験したさまざまな驚異は、現存する（と編者に思われる）あらゆる記録にまさるものです。だいたい、ひとりの人間の生涯に、これ以上の波乱が起こりうるとは、ちょっと考えられないことです。

主人公の語り口は、どこまでも謙虚で、まじめです。彼は一つ一つの出来事を、克明に、賢い人たちのひそみにならって——ということとはつまり、ひとつには、この手本を他の人たちの教訓たらしめるため、二つには、どのような思いがけない環境に人がおかれても、そこに必ずあらわれる神の英知の正しいことを示し、それに敬意を表わすため、ということですが——取り扱っているのです。

編者は、この話は事実を正確に語ったものであると信じています。つくりごとらしいところは、まったくありません。それに、こういう類たぐいのものは、一気に読むのが例ですから、読者にとっての効用は、娯楽という点からみても、利益という点からみても、つくりごとであろうとなかろうと、どっちみち同じことだろうと考えられます。そういうわけですから、ありていにいうなら、この本を出版することにより、編者は世人に大いに尽くしている、と自負するものです。

ヨーク出身の船乗り、ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議な冒険

船難破し、乗組員全滅す。ただひとり岸に打ち上げられしより、二十八年間、アメリカ大陸沿岸、オリノコ河河口付近なる無人島にて暮らす。最後には不思議にも海賊に助けらる。以下は彼みずからの筆になるもの。

私は一六三二年、ヨーク市(イングランド北部の市)で、良家の子として生まれました。もともと、おやじはブレーメン(北ドイツの出身の外国人で、最初はハル(ヨーク市の南東)へ移住してきた)のですから、わが一家は地元者とはいえませんでした。父は商売で財をなし、その後、商売をよしてヨークで暮らすようになり、そこで私の母と結ばれたわけです。母の一族はロビンソンと名乗り、地元では名門に属していました。私の名ロビンソン・クロイツネルもそこからきたのです。しかし、ことばがそういうふうに崩れるのは英語では珍しいことではありませんが、クロイツネルが

なまり、人々は私たちをクルーソーと呼ぶようになりました。というより、私たちは、みずからクルーソーと称し、名前を書くときにもそう書きました。私の仲間もいつも私をクルーソーと呼んでいました。

私には二人の兄がおり、長兄は、有名なロッカート大佐(スコットランドのラナーク伯麾下の軍人として令名があった。一六二一―一七六)がかつて指揮したフランドー駐屯のイギリス歩兵連隊の中佐でしたが、スペイン軍相手のダンケルク付近の戦いで戦死しました。次兄はどうなったか、私にはとうとうわかりませんでした。ちょうど私の両親にとつて、私がどうなったのか、ついにわからずじまいだったように。

私は三男坊に生まれ、これという職業に従事するよう育てられなかったものですから、早くから頭は放浪の思いでいっぱいでした。父は、もう年老いていましたが、家庭教育や地方の授業料免除校の、一般水準としては、まず不足のない教育を私に受けさせてくれ、ゆくゆくは私を法律関係の仕事にでもつけるつもりでいました。ところが私のほうは、船乗り以外の仕事では満足できないという気持だったのです。こういう私の気持は、父の意志——というより命令——にも、母や友人たちの懸命の懇願や説得にも、まったく逆らうように私をしむけるのでした。その後、私にふりかかることになったのですが、不幸な生活へまっしぐらに向かつてゆく私のこ

いう性向に、どうも、なにか運命的なものがあるように思われるのでした。

父は、分別のある、きまじめな人でしたが、私がなにをもくろんでいるか予想できたので、それに対し、まじめな申しぶんのない忠告をしてくれました。父はある朝、私を自分の部屋（父は痛風でそこに引きこもっていたのですが）に呼びつけ、この問題について、懇々と私をさとししました。この国にとどまっておれば、りっぱな人たちと知り合いになり、熱心さと勤勉次第で財をなし、安楽な生活を送れる見込みもあるというのに、生まれた国をあとにする理由がどこにあるのか、ただ放浪してみたというだけではないか、と私にいうのでした。父にいわせると、やけくそになった人か、それとも勢いにのつた特別に恵まれた人だけが、やる気を出して人を抜き、世間並みを外れた分野で名をなそうとして、海外へ一か八かの仕事に出かけたものだ、というのです。また、こういういった類の仕事は、すべて私にはとても手が届かないほど高級か低級かのいずれかであり、私にふさわしいのは、その中間、つまり庶民の上層とでもいうべき境遇である、ということ。そしてこの境遇がこの世でいちばんいい境遇であり、人間の幸福にいちばんふさわしいものであって、肉体労働に従事する下層の人たちのように悲惨と困難や労働と苦勞にさらされないし、また上層の人

たちのように高慢、ぜいたく、野心、ねたみなどにわずらわされることもないということを、父は長年の経験で知ったというのです。父はさらにこういうのです。このまんなかの境遇がどれほど幸福なものであるかということは、次のことだけでもわかる、と。つまり、この境遇こそ他のすべての人たちがうらやむものであり、王様たちも、やんごとなき身の上に生まれた不幸をしばしば嘆き、両極端の中間に、すなわち卑しきものとやんごとなきものとの中間に生まれたほうがよかったと願ったことだし、旧約の賢者（ソロモン）も「我をして貧しからしめず、また富ましめず」（旧約聖書「箴言」三〇章八節）と祈って、中間の境遇が真の幸福の正しい規準であることを証言したのである、と。

父はまた、よく気をつけてみれば、次のようなことが必ずわかるはずだと私にいました。すなわち、この世の災難は、ほとんど上層と下層の人たちのものであり、中間の人たちは災にあうことがいちばん少なく、上層や下層の人たちほど、有為転変にさらされていない、ということ。いや、それだけでなく、上層の人たちのように背徳的な生活やぜいたくや放縱により、あるいは下層の人たちのように重労働、必需品の欠乏、粗食ないし食糧不足などにより、そんな生活の当然の帰結として、わが身に不健康と病氣をまねく人たちに比べると、わが中間

層は、心身の不健康や不安にさいなまれることが少ない、ということ。また中間層の生活は、ありとあらゆる徳目や楽しみに好都合であり、平和と充足とが、この中層生活のいわば侍女であること。節制、中庸、静穩、健康、社交、気持のいい気晴らし、それに望ましい楽しみなど、すべて中層生活にもなる祝福であるということ。また中道を歩む人たちは、この世を静かに安らかに過ごし、気持よく去ってゆく。下層のように手を使う労働、上層のように頭を使う労働のいずれにもわずらわされず、日日のパンを得るため奴隷のような生活を送るのを余儀なくされているわけでなく、また、やんごとなき身の人たちのように、心から平安を奪い、体から休息を奪い取るような錯綜した状況に悩まされているわけでもない。ねたみの情念に燃えたり、身のほど知らぬ野望に身を焦がすこともなく、安楽な境遇で、やすらかに世過ぎをし、人生の苦汁をなめることなく、甘みだけをたっぷり味わい、自分たちが幸福であると感じ、日々の経験によって、いよいよ強くその幸福を自覚する——と、ざっとこういうのが中間層の生活だと父はいうのです。

そのあとで、父は、このうえもなく愛情をこめ、諄諄と私に次のように説くのでした。無鉄砲なまねはよし、たほうがいい。おまえの性質からしても、家庭の環境からしても、陥らないですむはずの不幸に、あえて飛び込

む必要はなかるう。それにあくせくと金をもうける必要はおまえにないはず。わしはおまえの面倒をみて、さきほどからすすめていた中層の生活におまえがちゃんといれるように尽力するつもりだ。もしそれでもおまえが安楽と幸福を感じないのだったら、それはまったくおまえの運命か、それともおまえの落度のせいにはいかない。わしは、息子にの損になるにきまつているゆき方に対して警告を発して、父親としての義務を果たしたのだから、もうこれ以上責任を負えない。要するに、わしの指示に従って、腰を落ち着け、家にとどまるなら、おまえに對してできるかぎりのことはするが、おまえの家出を少しでも奨励しておまえの不幸に加担するようなことは絶対にしないつもりだ。おまえの長兄がいいみせしめだ、と話のしめくくりとして長兄のことを引き合いに出すのでした。父は長兄に對してもフランダース地方で行なわれていた対スペイン戦争に加わらないよう、私にやっただと同じように熱心に説得を試みたのでしたが、ついに翻意させることができず、長兄は青年の客氣にかられて従軍し、戦死したのでした。父はさらに私に、おまえのために祈ることをやめはしないが、もしおまえが、どうしてもこの愚挙に出るというのなら、神はおまえを祝福してくださるまいし、救いの手の来そうもない状況になつて、おまえはわしの忠告を無視したことを後悔するよう

にきつとなるだろう、といいきるのですした。

父の話のおしまいころ（このあたりは、父も自分でそれに気づいていなかったでしょうが、私の運命の真実の予言だったのです）、特に戦死した長兄のことを口にしたとき、父の頬を涙がとめどなく流れるのに、私は気づきました。そして、救いの手が来そうもない状況になっておまえは後悔するようきつとなるだろう、といったときなぞ、感極まって話は中断、わしは胸がいっぱいで、もうおまえに何もいえない、というのですした。

私は父の話に心から動かされました——動かされないわけにまいりません。そこで、もう海外へ出ることはあきらめ、父の望みどおり家に落ち着こうと決心しました。しかし、悲しいかな、数日でその決意は、すっかりにぶってしまいました。そして、要するに、父にこれ以上しつこくいわれるのを避けるため、数週間後に、父のもとから逃げることに決めたのです。しかし、この決意にかりたてられてすぐ行動を起こすというようなことをせずに、母を、ふだんよりきげんがいいと思われるときにつかまえて、私は自分の心境を説明したのです。つまり、世間を見たいということしか自分の念頭になく、いまほかのどんな仕事を始めてみても、腰を落ち着けて終わるまでやり通す気持にとてもなれない。お父さんの同意があってもなくても自分は出てゆくつもりだから、反対を

押しきって私が出ていったという形にするより、同意を与えてくれたほうがいいのではないか。それに私はもう十八歳だし、商人の見習い徒弟や弁護士^{ロウソク}の書記になるにはおそすぎる。たとえなつたとしても、徒弟期間をつとめおおせる自信はないし、期限前に主人から逃げ出して船に乗り込むにちがいないのだから、一航海だけ外へ出してくれるようにお父さんに話をつけてもらえないだろうか。そうしてもらえぬなら、たとえ帰国して仕事に気が入らなくても、もう二度と出かけるつもりはない。そして人一倍仕事に精出し、航海でむだにした時間の埋め合わせをすることを約束します、といったのです。

これを聞くと母は、気も転倒せんばかりでした。そして、こんなことでお父さんと話し合ってもむだなことは知っている、というのです。お父さんは、なにがあんたのためになるか、知りすぎるほど知っているので、こんなためにならぬことに賛成されるはずがありません。それに、お父さんとあんたがあれほど話し合い、お父さんの口から出た（にちがいない）あんなやさしいことばを聞いたあとで、どうしてあんたがこんな大それたことを考えつくことができるのか、お母さんにはわからない、というのです。つまるところ、あんたが自分で身を減ぼしたいというのなら、もう救いようがありません。とにかく私たちの同意は出ないものと覚悟してほしい。お母

さんは、おまえの破滅に手を貸すのはごめんです。お父さんは反対だったが、お母さんが賛成だったなどとは、けっしていわせませんよ、というのです。

母は父に口をきいてくれようとはしませんでした、あとから聞いたところによると、私との話を全部、父に報告したということです。父は話を聞き、ひどく心配をして、最後には溜息まじりに、こういったそうです。

「あいつは家にとどまっておれば、幸福になれるが、海外へ出たら、このうえもなく不幸な目にあうにきまっている。同意を与えるわけにはいかん」と。

私が出たのは、それから一年近くたってからのことでしたが、その間も、落ち着いて仕事を覚えたらどうだという類の提案に私はかたくなに耳をふさぎつづけ、両親に対しても、私の気持ちがどういう方向に私をかりたてているか知っていながら、それに断固反対するのはどうということなのか、としばしば苦情をいいました。

私はある日、なんとということなしにハルの町へ行き、そのときは、べつに家出をするつもりはなかったのですが、とにかくハルにいたら、自分のおやじの船に便乗してロンドンへ行くことになっていた一友人が、私にいっしょに行かないか、と船乗りの特典、すなわち船賃無料という手で、私をさそったものですから、渡りに船とこの話に飛びつき、父にも母にも相談せず、また知らせる

ことさえしませんでした。そのうち耳にはいるだろうと考え、神の祝福も父の祝福をも求めず、状況とか結果とかをまったく顧慮せず、魔の（これは神のみぞ知る）一六五一年九月一日に、ロンドン行きの船に乗り込んだのでした。およそ若い冒険家で、私の場合ほど早く災が始まった例はないでしょうし、またその災が私より長く続いた例もないのではないかと思います。船がハンバー港から出たかと思うと、恐ろしい勢いで風が吹き、波が立ちはじめました。船に乗るのはこれが初めてのものですから、私は、なんともいえないほど体の調子が悪く、心は恐怖でいっぱいでした。こんどこそ、自分のしでかしたこと、つまり、父の家を勝手に飛び出し、自分の義務を放棄したため、天の当然の裁きを受けたわけですが、そのことを本気で反省しはじめました。両親のもっともな忠告、父の涙と母の懇願とが、いまさらのように、よみがえってきました。私の良心も、まだ後年のようにかたくなになっていなかったもので、私が親の忠告をないがしろにし、神と父への義務にそむいたことで、私を責めるのでした。

この間、嵐はいよいよ勢いを増し、私にとって生まれてはじめての海は、たいへんな荒れようでした。もっとも、この嵐は、その後私が何度も経験することとなった嵐とは、まったく比べものになりませんでしたし、数日

後に会ったやつにも及びませんでした。それでも、まだ新米で、およそこういうことには不案内だった私を動揺させるには、十分すぎるほどでした。波という波がすべて私をのみこみそうな感じがし、船が海の凹みに落ちこむ（そのように私に思われたのですが）たびごとに、二度と浮かび上がらないのではないか、という気がしたものでした。この苦しみのさなかに、私はくりかえし誓いをたてたり、決意を新たにしたりしました。すなわち、万一、神の思召^{しめぞ}で命が助かり、陸地を再び踏むことが許されるものなら、その足でまっすぐ父のもとへ帰り、もう死ぬまで二度と船には乗るまい。そして父の忠告に従い、このような災難にけっして陥ることのないようにしよう、と。いまにして私は、中層の生活について父の見方が正しかったこと、また父の生涯が、海で嵐にあって、陸で苦勞をなめたりということもなく、どれほど安楽なものであるか、はつきりわかりました。私は、心から改悟した放蕩息子^{ほうとうし}のように（新約聖書「ルカ」、父のもとへ帰ろうと決心したのでした。

この賢明にして冷静な考えは、嵐の続いている間、そしてその後もしばらく続きました。次の日になると風はおさまり、波もおだやかになり、さすがの私もすこしは慣れてきましたが、まだその日は、船酔い気味だったので、終日、沈鬱な表情を浮かべていました。ところが、

日没ごろから、空は晴れあがり、風はすっかりやみ、すばらしい夜になりました。夕日の没する光景もみごとでしたが、あくる日の夜明けの美しさも、それに劣るものでありませんでした。ほとんど風もなく、鏡のような海面を、朝日が照らす光景のすばらしさは、私にとって、生まれてはじめてのものでした。

私は、前夜よく眠ったので、船酔い気分もすっかりとれてしまい、爽快な気分で、きのうあれほど荒れ狂っていたのに、その後、それほど時間もたたずして、これほどおだやかになれる海というものを、感嘆しながらながめていました。そこへちょうど、父のもとへ帰ろうという私の決意をひっくりかえしてやろうといわんばかりにこの船旅へ私を誘い出した友人がやって来るのです。「おい、ボブ」と彼は私の肩をたたきながら、「その後どうだい。昨晚、ちょっと風が吹いただけで、もうおじけづいたのと違うか」というのです。「あれでちょっと吹いたというのかい？ ひどい嵐だったじゃないか」「嵐だって？ ばかだな、おまえは。あれを嵐というのかい？ あんなもの、なんでもないじゃないか。しっかりとした船と、その船を操作するだけの海面さえあったら、あんな突風なんか、ぼくら問題にしないな。でも、君はまだ新米だからなあ。さあ、ボンチ酒でもこさえて、忘れちゃおうや。ほら、すばらしい天候になったじゃない

か」という調子。私の身の上話のこの情けない個所を簡単に話せば、こうなんです。私たちは、船乗りの昔からのしきたりに従い、ボンチ酒をこしらえ、それで私はすっかり酔っぱらい、情けないことに、一夜にして、私の後悔も、いままでの行状に対する反省も、将来に対する決意も、雲散霧消してしまったのです。要するに、嵐がおさまリ、海が波一つないおだやかさにもどったように、私のほうも、興奮はおさまリ、海にのみこまれるという恐怖や懸念もどこかへ飛んでいってしまい、宿願再び頭をもたげ、嵐の最中にしおらしくたてた誓いや約束は、すっかり忘れられてしまったのです。もともと、ときどき思い出したように反省し、殊勝な考えが、いわば復讐の試みを、ときどきするのでしたが、私はそれをふりはらい、まるで病氣から抜け出すように、そういう考えから抜け出し、そういう発作（と私は呼んでいたのです）のふりかえしに打ち勝つようにつとめ、数日にして、完全に自分の良心を抑えこんでしまったのです。それは、良心になんか悩まされまいと決意している世の若者でも、とてもこれ以上は望めないほどの完全な勝利でした。しかし、もう一つ試練が私を待ち受けていたのです。神は、こういう場合によくそうするのですが、こんどはまったく抜け道のないようにしようと決意されたらしいのです。私が今回の件でまだ神の救いに思いをいたさないという

のですから、今回は、どんな年季のはいったしたたか者でも、その恐ろしさを認め、命拾いをしたのはまったく神の慈悲のおかげです、と告白せざるをえないほどのひどい目にあうこととなったのです。

海へ出てから六日目に私たちはヤーマス沖の投錨^{いぐさ}地に着きました。風が逆風だったリ、ときにはまったく風がなかったりしたものですから、あの嵐以来、船はあまり進んでいませんでした。私たちはここに投錨^{いぐさ}しましたが、相変^{あひ}わらずの逆風、すなわち西南の風が、一週間あまりも吹きつづけるものですから、そのまま足止めを余儀なくされました。その間、ニューカッスルを出港した船が、次から次とこの投錨^{いぐさ}地にはいつてきました。ここは、川を通航^{こうかう}可能にするような風が沖合から吹いてくるまで、船が待機する、いわば公共の港になっていたのです。

しかし、私たちは、この沖合の投錨^{いぐさ}地にこんなに長く停泊せず、潮の干満を利用して早い時期に川へ船を入れるべきだったのです。風の勢いがすこし強すぎましたし、停泊四、五日目あたりから、いよいよ勢いを増してきたのです。とはいえ、この投錨^{いぐさ}地は港同然とみられていましたし、船の錨^{いぐさ}はしっかりと固定し、投錨^{いぐさ}索具はがんにようだったので、船の連中は平然として、危険など念頭になく、休息をとったり、はしゃいだりして時間を過ごしていました。ところが、八日目の朝、風の勢いは

いよいよ強くなってきたので、無事に停泊が続けられるよう、全員総出でトップ・マストを下ろし、所要場所の荒天対策に手抜かりのないようにしました。正午ごろになると、波は恐ろしいほどの高さになり、船の前部が傾き、いくども波をかぶるものですから、私たちは再三、錨が外れたのではないかと心配しました。船長は非常用大錨をも繰り出すように命じたので、私たちの船は、錨を二個使って停泊を続ける形となり、錨用のケーブル(錨索)もいっぱいになり繰り出されていました。

このころになると、文字どおりの暴風雨となってきました。こうなると、さすがの船員たちの顔にも、恐怖と驚きの表情とが浮かびはじめてくるのでした。船長は、船を守る仕事に抜かりはなかったのですが、船室を出たり入ったりして私のそばを通るたびに、何度もそうっと「主よ、なにとぞ憐れみをたれたまえ。このままでは、全員おだぶつです。全員冥土行きになりそうです」といったようなことを、つぶやくのが聞こえました。この最初の騒ぎのあいだ、私は茫然自失、船尾部の寝棚で、じっと横になったままでした。私の気持は、名状しがたいものでした。いまさら、私があればはつきり踏みにじり、かたくなにはねつけた最初の改悟にもどるわけにはまいりません。とにかく、死の苦しさがいまさらやってくるとは思えず、この嵐も前回の嵐と同様、なんという

ことなく過ぎさるだろう、と、たかをくくっていたのです。しかし、船長までが、いまいったように、私のそばへ来て、だれも助からないだろう、とぼやくものだから、これはただごとでない、とこわくなってきました。私は自分の寝棚から出て、外をながめてみましたが、こんなすさまじい光景は、生まれてはじめてでした。波は山のようには隆起したかと思うと、三、四分ごとに私たちの上にどっと崩れ落ちてくるのでした。船のまわりを見ても、目をおおいたくなるような惨状でした。私たちの船の近くに停泊していた二隻の船は、よく見ると、喫水線すれすれまで荷物を積んでいたものですから危険予防のためマストを切り倒してしまい、いまはマストの影もありませんでした。船員たちは、一マイルほど前方に停泊していた船が浸水沈没したなどと大声でいいあっていました。さらに二隻は、錨が切れたため、危険きわまりないことですが、投錨地の外、大海のまんなかへ流され、おまけにマストが一本も残っていない、という状態でした。総じて軽い船のほうが、図体の大きい船ほど、ともに嵐を受けないので、被害がすくないようでした。それでも、そのうち二、三隻は、私たちの船のすぐそばまで流され、わずかに残った一本のスプリット帆(第一斜橋帆)で風を受けながら、また遠ざかっていくのでした。夕刻ころ、航海士と水夫長は、船長に船の前橋(ぜんきょう)を切り倒す許可を与えて

ほしいと懇願したのですが、船長はなかなかうんといません。しかし水夫長は、もしそうしなかったら船の沈没は免れない、と強くい張るものですから、船長も同意を与えざるをえませんでした。ところが、前橋を切り倒してみると、こんどは太橋^{イサナト}がぐらぐらして、船をゆさぶるものですから、それも切り倒すこととなり、けっきょく甲板をすっきりさせざるをえなくなったのです。こういう状況を目の前にして、まだ駆け出しの船乗りにすぎず、以前、ほんのちょっとした嵐にさえあればど動転した私がどういう心境になっていたか、読者も容易に想像できることと思います。そのとき私の念頭を走ったさまざまな想念を、これだけの時間の隔たりを置いて表現しようとすれば、次のようにいえるのでないかと思えます。つまり、前にもう二度と船に乗るまいとあれほど固く決意していたにもかかわらず、当初の自分の誤った決意へいつのまにか私が逆行してしまったという事実のほうが、死自体よりも私にとって十倍も恐ろしいことだったのです。嵐の恐怖にこの恐ろしさが加わり、ことばで尽くしがたい心境になったのです。しかし、それでも最悪の事態にはまだなっていなかったのです。嵐があまり激しい勢いで続くものですから、水夫たちも、こんなひどい嵐ははじめてだと口々にいうのでした。私が乗っていた船は、船体そのものは、しっかりしていたの

ですが、船荷で喫水線が上がっており、波間にのたうちまわるものですから、水夫たちは、船がファウンダー^{沈没}するぞと叫ぶことがしばしばでした。私のほうからたずねて教えてもらうまで、この「ファウンダー」がなにを意味するのか知らなかったのですが、それは、ある意味では私にとってかえって好都合でした。嵐の勢いがあまりにも激しいものだから、私は、めったにお目にかかれない光景、すなわち船長と水夫長とが、つまりほかの連中より事の成り行きのわかる人たちが、祈りをささげ、船の沈没を覚悟している姿を目撃することさえできました。真夜中に、これまでの難儀でまだ不足というのでしようか、様子を見に船底へおりていった水夫の一人が、船底から水がはいりはじめたぞ、と叫ぶのが聞こえました。さらに一人は、船倉部は四フィートも浸水している、と報告してきました。さっそく全員総出で排水ポンプにかかるよう呼び出しがかかりましたが、その呼び出しを耳にすると、私はまるで自分の心臓がとまったように思われました。私は、ちょうどベッドの片側に腰をおろしていたのですが、そのまま仰向けになり、寝棚の奥にひっこんでしまいました。ところが、たちまち私はたたき起こされ、おまえさんいままでなんの役にも立たなかったが排水ポンプの操作なら人並みにできよう、とどやされました。そういうられると私も元氣を取りもどし、

ポンプのところへ駆けつけ、大はりきりで仕事にかかりました。この間、船長は、この嵐の中での停泊航行は無理、脱出して大海へ出ざるをえないと判断し、船の近くへ軽石炭船がやってこようとしているのを見て、危険信号の発砲を命じたのでした。その発砲がどういう意味をもっているのか、まったくにも知らなかった私は、びっくり仰天、てっきり船が難破したのか、それともなにか恐ろしいことが起こったものと思いました。そして、要するに、私は驚きのあまり、失神して倒れたのでした。ちようどだれもかれも自分の身の安全のことで手いっぱいなのときだったので、だれも私のことなど眼中になく、どうなったのか気にもかけていませんでした。ポンプのところへやって来たある水夫などは、足で私をはらいのけ、てっきり死んだものと思って、ほうっておくというほどでした。私が意識をとりもどしたのは、その後だいぶたってからのことでした。

私は排水作業を続けましたが、船倉部の浸水はひどくなる一方で、船の沈没が避けられないことは明らかにになりました。嵐の勢いは、少々衰えはじめはしたものの、港にはいるまで船は持ちそうもなかったので、船長は救助信号の発砲を続けさせました。すると私たちの船のすこし前方でこの嵐を乗り切った軽装船が私たちを救助するため、思いきってボートを出してくれました。このう

えもないほどの危険をおかして、そのボートは私たちの船に近づいてくれたのですが、いかんせん、私たちがそれに乗り移ることも、ボートがこちらの舷側に接することも、不可能でした。しかし、自分の命を危険にさらしてまで私たちを助けにボートを漕いできたこの人たちを見て、わが方の船員も、拱手傍觀しておれず、ブイのついたロープを船尾から投げ、そのロープを思いきって繰り出しました。それを彼らは、苦心慘憺、危険をおかしてつかみとり、それでようやく私たちは彼らのボートをかちらの船尾のすぐ下のところまで引き寄せることができました。さっそく私たちは全員ボートに乗り移りました。私たちを乗せたボートを彼らの母船へもどすことは、彼らにとっても、私たちにとっても、意味のないことでしたので、ボートを波にまかせながら、できるだけ海岸のほうへ近づけよう、ということになりました。うちの船長は、もしこのボートが海岸で難破するようなことにもなれば、必ず弁償をすると向こうの船長に約束しました。というわけで、あるいはオールを使ったり、あるいは流されたりしながら、私たちを乗せたボートは、北のほう、遠くウィントン岬（ノーフォー）近くの海岸へ向かって、それていきました。

私たちがボートに乗り移ってから十五分ちょっとしかたたないうちに、私たちの船が沈没するのが見えました。